

日本科学者会議

京都支部ニュース

12月号 No.502

2025年12月12日発行

〒604-0931 京都市中京区二条通寺町東入榎木町95-3 延寿堂南館3階

Tel : 075-256-3132

E-mail : board@jsakyoto.sakura.ne.jp

URL : <https://jsakyoto.sakura.ne.jp>

ゆうちょ銀行振替口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：01050-6-18166

ゆうちょ銀行総合口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：14480-2800181

上記総合口座を他金融機関からの会費振り込みの受取口座として利用される場合は以下の内容を指定して下さい。

店名：四四八（読み ヨンヨンハチ） 店番：448. 預金種目：普通預金 口座番号：0280018

・・・・・ 目次 ・・・・・

・ウトロ平和祈念館ツアー・参加レポート	2
・『日本の科学者』読書会 11月例会(11/25)の報告:10月号特集:「科学リテラシーを育む理科教育」	5
・治安維持法・京都学連事件 100周年実行委員会拡大事務局会議報告	10
・書籍紹介『不登校、ひきこもりと共に生きる社会～本人、家族の声から考える』田中義和、藤本文朗、森下博編	11
・科学カフェ京都 11月定例会岡田知弘氏講演『湯川秀樹旧宅の京都大学への移管と現状について』を聞いて	12
・支部主催・関連行事案内	15
・支部幹事会だより	16

<【改めてのお願い】2025年度会費、年内の納入にご協力ください>

今年度会費の納入率は11月末現在、67.5%にとどまっており、例年を大きく下回っています。すでにお伝えしましたように、このままでは年明けから（1月以降）の資金が枯渇します。

年内に今年度会費（一般会員：14,400円、特別会費会員：7,200円、家族割会員：4,200円、若手会員：4,200円）の納入にご協力くださるよう切にお願い申し上げます。未納の方は、11月に会誌を送付した際に同封した振込用紙を利用して送金をお願いいたします。過年度分の未納会費がある方は、振込用紙に記載の金額をあわせて納入いただきますようお願いいたします。

なお、ご不明な点につきましては、支部財政担当幹事・細川孝宛にメールでお尋ねください（Emailアドレスは、hosokawa@biz.ryukoku.ac.jp）。（支部財政担当幹事）

ウトロ平和祈念館ツアー・参加レポート (2025年11月22日/JSA京都支部・院生若手交流企画)

2025年11月22日、JSA京都支部の院生有志によって企画された「ウトロ平和祈念館ツアー」が開催された。当日は3名の院生・若手研究者が参加し、京都駅から近鉄京都線で伊勢田駅へ向かい、駅から徒歩でウトロ地区へと足を運んだ。道中には茶畠があり宇治らしさを実感したものの、それ以外は一般的な住宅街のように見えた。移動中には自然と会話が生まれ、参加者同士がリラックスした雰囲気で学びの時間を共有することができた。

ウトロ地区(正確には京都府宇治市伊勢田町ウトロ 51番地)は、1940年から日本政府が推進した「京都飛行場建設」に集めら



写真 1.伊勢田駅からウトロ平和祈念館に向かう道中の景色



写真 2.ウトロ平和祈念館

れた在日朝鮮人労働者たちの飯場跡に形成された集落である。戦後、朝鮮人労働者たちの居住の場として形成されたこの地区は、その後も長年にわたり法的に不安定な居住環境や社会的差別と向き合ってきた地域である。例えば1980年代以降、住民と支援者による粘り強い運動によって土地の買取・行政支援・差別撤廃の取り組みが積み重ねられてきた。「ウトロ平和祈念館」はこうした歴史を継承し、差別や排除のない社会をめざすための学びの場として2022年4月に開館した。

祈念館に到着すると、まず驚くのは建物の綺麗さと立地であり、祈念館の南側に自衛隊駐屯地、東側に中学校、西側に大きな空き地とマンションがあるのはこの地域の歴史の複雑さを物語っている。建物自体は非常に綺麗であり、入り口を通ってすぐスタッフの方による丁寧なガイダンスを受けた。館内では、戦時中の飛行場建設の実態を示す資料や、戦後の不安定な居住環境を映し出す写真、住民運動の歩みを紹介する映像などが展示されている。参加者たちは一つひとつの展示に足を止め、メモを取ったり、スタッフに質問をしたりしながら学びを深めた。

また、祈念館の展示は単に歴史の紹介にとどまらず、現在のヘイトスピーチ問題や、当館の開館を阻止することを目的のひとつとしたヘイトクライムの放火事件にも言及している。また、パレスチナ問題、沖縄の米軍基地の問題、ジェンダーの問題を取り上げたポスター、チラシも多く、社会運動のハブとなっていた。社会運動研究、労働運動研究、アート研究など多分野のバッ



写真3. 各種社会問題を取り上げたポスター やチラシ

クグラウンドをもつ参加者同士で活発な意見交換が行われた。

本ツアーハは、単なる史跡見学にとどまらず、差別・排外主義・貧困・行政政策といった複合的な社会問題を歴史的文脈から理解し、研究者として向き合うべき倫理と視座を再確認する時間となった。日常の研究活動ではなかなか得られない、現場に触れながら議論を深め合う機会は、若手研究者にとって大きな刺激となったと思う。何より、自分の世界に閉じこもりがちな研究者たちが、ツアーハ後にカフェや韓国料理屋で歓談する時間は貴重であった。

最後に、今回のツアーを受け入れてくれた祈念館スタッフへの感謝を述べたい。この学びを、今後の研究や教育実践へどのように結びつけていくかが、参加者一人ひとりに問われている。ツアーで得た気づきや

対話が、より差別のない社会をつくるための実践につながっていくことを期待したい。

報告：瀬名波 栄志

『日本の科学者』読書会 11月例会(11/25)の報告: 10月号特集：「科学リテラシーを育む理科教育」

標記例会が 11月 25 日(火)15 時 30 分より 17 時 30 分まで Zoom を用いて行われた。参加者は 5 名で、特集から 3 編の論文の紹介があった。

岩間世界『人口減少時代における社会教育としての環境測定教育の現状と課題について— 北海道小樽市における事例を中心として』(報告：政宗貞男)

著者は熱測定、有機合成、結晶工学を専門としており、博士学位取得後 10 年以上、文系大学で教養課程「化学」の講義と学生実験を担当している。著者の出身地である小樽市において子どもとその保護者を対象とした科学教育活動を目的とする NPO 法人を設立し、活動を続けている。論文では小樽市（人口減少率全国 1 位）における社会教育環境の変遷と NPO 法人設立に至る経緯、NPO 法人の活動としての環境測定教育活動例の報告、人口減少が社会教育活動にもたらす困難の実情と今後の課題を述べている。

小樽市の特徴

小樽市は明治政府による開発で石炭や道産品の積出港として港湾施設が整備され、北海道初の鉄道も敷設された。鉄道輸送網の充実、北方領土経由での大陸への海上輸

送港としての発展に伴って商社・金融機関が進出し、「神戸・横浜に次ぐ商港」として繁栄した。

第二次大戦後は北方領土と貿易経路の消失、1960 年代の高度経済成長期の産業構造の転換と物流経路の変化等により、物流拠点としての地位は低下し、小樽市は「観光都市」化を目指すことになる。ただし、観光都市としての住民の生活環境整備が成功したとは言えず、人口の年齢構成（2005 年国勢調査）を見ても 18 歳以下の人口構成比は低い。

小樽市の人口の推移をみると、1903 年、函館に次ぎ道内第 2 位、1920 年、第 1 回国勢調査時人口は 108000 人で全国 13 位。その後第二次大戦を経て 1964 年、人口はピーク 207000 人となり、以後人口減少フェーズに入る。2015 年から 2020 年までの 5 年間の人口減少率が、人口 10 万人規模の都市として第 1 位（-8.7%）であり、「あと 40 年ほどで消滅が確実な自治体」とされている。同規模の人口減少率上位の他の

都市と比較すると、人口の年齢構成（2005年国勢調査）における小樽市の特徴として、18歳以下の人口構成比率が低く、札幌で働く若い世代が子育ての場として小樽を選択するということにはなっていないようである。

人口減少と社会教育環境への影響

大幅な人口減少と、若年層の人口構成比率が低い（子どもの割合が低い）ことにより、社会教育は重大な危機に陥っている。特に科学館・博物館を中心に展開される社会教育のうち、理科教育への影響が大きい。人口ピークの時期と同じ1964年に「小樽市青少年科学技術館」が開館し、児童・生徒を対象とした理科教育が活発に展開されてきたが、人口減少による税収減と観光都市化政策のなかで、同科学技術館は2007年に閉館し、社会教育機関としての機能は「小樽市総合博物館」に移行された。総合博物館の役割は観光都市化政策と親和的であり、産業遺産である運河、倉庫群と鉄道関係の遺構保存、資料収集などに重点が置かれているように見える（小樽市総合博物館 website より）。社会教育の場で中心的役割を果たすべき博物館の専門学芸員の定員削減と非正規雇用者割合の増加が続いていること、これが、総合博物館への移行後の科学教室の規模の大幅な縮小につながる。

科学教室をめぐるこのような状況の中で、2010年頃から、総合博物館の科学教室の側面支援を目的とした活動が有志により始められ、2016年にはNPO法人「小樽青少年科学技術の芽を育てる会」（NPO法人コロット）の設立に至る。以後、総合博物館との協力体制の下で実験・工作教室、科学体

験教室などをNPO法人として開催している。

科学体験教室の内容は天体観測、プログラミング、木工、実験教室など、多岐にわたっている。会場を市内公共施設に選ぶなど地域・地方行政との関係（連携体制）にも配慮している。本論文で実践例として紹介されていたのは環境測定の一環としての温度測定実験であり、測定装置の組み立てと測定及び表示用プログラミングを体験する。屋外での温度測定実験を通して温度センサーの周辺環境と測定値の関係を調べ、センサー周囲の環境（相）と測定値への影響、飽和蒸気量と温度の関係、結露の理由と解消法、などを考察する構成となっている。理科教育における温度や熱を対象とする学習内容は小・中学校では「エネルギー」、「粒子」、「地球」という領域で扱われており、高校では「物理基礎」、「物理」および「化学基礎」、「化学」で扱われている。小学生から高校生までを対象とする「科学実験」では学習内容の相互関係に注意しておく必要があると思われる。また、最近の温度計はデジタル表示の値を読めばよいのだが、「科学リテラシーの育成」という観点からは、種々の温度測定法の原理についても触れる工夫が必要ではないかと感じた。

コロナの影響で教室が中断する前の活動については「NPO法人コロット」のWebsiteに写真入りで紹介されており、その雰囲気を感じることができる。コロナ終息後、科学教室は再開され、2024年度は実施回数約100回、参加者数は延べで1300人に及んでいる。

少子高齢化の影響は多面的に表れているが、小樽市の場合児童生徒数の減少（8000

人（2010年）→5500人（2024年））に伴って、子ども向け科学教室助成金の削減と事業の定員充足率などへの要請が強まり、募集定員など事業実施形態を規定することになっている。他の多くの分野と同様にスタッフの高齢化と後継者の育成問題も深刻である。

今後の課題

一般論ではあるが、教育事業に費用対効果の概念はそぐわない。子どもが受ける教育の質に地域差があつてはならないことを改めて認識すべきである。人口減少問題はどの都市でも今後確実に起こる問題である。小樽市の例のような実践の記録を残すことは、まず重要なことである。さらに社会教育としての科学教育を持続可能なものとするために何が有効・必要か、学校教育との関係はもとより、様々な側面から議論を深め、財政問題を含めた改善策を探ることが今後の課題であると言えよう。

討論

討論では人口減少率の高い都市の年齢分布とその理由、公教育と社会教育の連携の可能性などについて議論が交わされた。居住地域の違いによる教育の質・教育環境の差があつてはならないことを改めて認識することの重要性が読書会参加者の共通認識として存在することが確認された。

**木村隆良、新居毅人『理科好きを醸成する科学実験教室—就学前児童から中学生および保護者対象の科学実験教室を中心に』
(報告:坂本 宏)**

著者は近畿大学総合理工学研究所で長年にわたり小中学生向け出前授業を行ってきており、本論文はその報告である。まず「は

じめに」では小中学校での理科教育について、その時間数の減少、さらに「理科離れ」の問題を指摘している。学力低下の指標の具体例として OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)の 2003 年度の結果をあげている。著者らはその対策として、1980 年代から小中学校への出張実験、イベントでの体験実験や演示実験を実施してきた。記録を取り始めた 2003 年から 2025 年 3 月までに 11 万 6064 人が参加している。小中学生時代に非日常的な科学実験を体験することの重要性に基づき、対面型体験実験を実施している。また、教員研修会において、安価な材料を用い、準備や安全性に問題ない理科実験を紹介し、理科教育の材料提供を行っている。著者らが開発した実験項目は、数学・物理・化学・生物・地学など 300 種以上に及ぶ。同じ実験でも参加者ごとにとらえ方や理解が異なることから、他者との感性や理解の違いを理解・融合・総括する過程を経験することができる。こういう過程は社会科学・人文科学的思考力の育成にも通じる。参加者から高度の科学技術者や教員研究者などが育っている。

「1 実験」では、体験実験の詳細について解説している。まず「(1)体感体験実験について」ではテレビや YouTube で見られる科学実験コンテンツが「不思議がらせる」

「面白がらせる」もので、座学と違い視覚的刺激を加えてはいるが、視聴者が主体でない受動的学習であると指摘する。体験実験は参加者自身が主体的に操作することで五感を刺激し、工夫による変化を体験することで新たな発見に感動することができる。

「知る喜び」「学ぶ楽しさ」「わくわくする好奇心」は人間の能力を高める最大の原動

力であり、人間力向上の機会を与え自発的学習能力を養うことが期待できる。

「(2)実施体制・小グループによる実施体制」では具体的な実施方法を解説している。実施時間は3時間までとし、学年別・能力別の少人数グループ体制を組む。各グループにはファシリテーター(FC)を配置する。FCは実験の趣旨、手順、原理を良く理解し、予備実験を指導者と共にを行い、安全への配慮なども修得する。またFCは参加者と年齢が近く、参加者に寄り添い、同じ目線で実験について質問し、回答を誘導し褒め伸ばす。2020年3月から7月はコロナ禍で中止となったが8月からはオンラインで実施した。対面とは違うオンライン固有の効果も見られたが、対面で得られる経験には及ばない。現在は対面で実施している。

「(3)実施の重要点」では①安全②材料が安価③材料が入手しやすい④短時間で成功体験が可能⑤実験後に発展が可能⑥準備や後処理が難しくないことなどに注意している。

「(4)実施例：空気の中身、化学量論、熱化学」の項では体験実験の一例として「安全な質量保存則の実験法」が説明されている。使い捨てカイロとペットボトル(PB)を使用する。①PBに使い捨てカイロの中身を入れ、密閉し、秤量する②激しくPBを振る→PB内の酸素ガスが鉄と反応し体積が減少する→秤量から質量が変わらないことを確認する③PBが暖かくなっている→反応により発熱を理解する④水の入ったメスリンダーに反応前後のPBを入れ、体積変化から反応した酸素量を確認する⑤市販の酸素ガスを用いPB内の酸素濃度を変えたり、使い捨てカイロの量を変えたりし

て展開が可能である。

「2 結果と考察」では実験直後のアンケートの集計結果について議論している。最近5年間(2020-2024年)の1万7174人の参加小学生および保護者の集計結果に基づいている。「Q1：今回のような体験講座を受けるのは何回目ですか？」体験実験への初めての参加者は71%であった。人口5万人以下の都市や複式学級の地域では、全員が初めての体験実験参加である所も多く見られた。「Q2：今回受講して、理科についてどう思うようになりましたか？」受講前から理科好き74%、受ける前理科嫌いだったが受けた後理科好きになった22%（最大65%）であり、実施の効果が見られた。小学校では児童が体験を感じる授業が少ないともいえる。学校教員に教科研究や実験準備の時間がないことなどが原因していると考えられる。「Q3：面白かったですか？」学年によらず、97%が面白かった、3%がどちらかといえば面白かったとの回答で、実験自身を楽しんでもらえた。「Q4：自分なりに理解できましたか？」理解の程度は学年差と個人差が大きく主観的ではあるが、87%が理解できた、11%がどちらかといふと理解できたとの回答であった。特に、低学年の受講者にとって理科は学校での学習前ではあるが、日常で使われている事象の主要な点を切り出し、短時間で原理がわかるよう設計したため、理解できなかったとの回答はなかった。「Q5：今回の参加をきっかけに、理科に対する興味・関心が増えましたか？」今回の体験実験に参加して理科に「興味が増えた」は95%、「どちらか」というと興味が増えた」は5%で、参加者全員に良い効果をもたらしたと考えられる。

「Q6：今後、今回のような体験講座があったらまた参加したいと思いますか？」今後このような体験実験があれば参加したいと全員が答えたことからも参加者が楽しく実験して理科に興味を持ったことを示していると考えられる。「Q9：実験時間の長さはどのように感じましたか？」「短い」と「少し短い」の和が 50% であった事は、実験に集中できたこと、もっと色々なことを探求したいという自発的学習意欲が現れた結果と考えている。2% の少し長いは 5 月に実施したときの入学間もない 1 年生の回答で、実施時間が長いとの回答はなかった。他に参加者の学年などの質問もある。

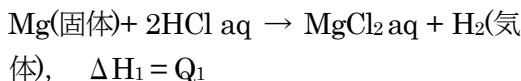
「(3)アンケートの結果からみえてくること」では次のように分析している。目の前のものを凝視し、手で触り、変化の音を聞くなど人の持つ五感を使っての体験実験は、僅かに何かを変えることによって全体が変化する驚きから感動を引き起こす。自らが望む方向に結果を変えていきたい等の研究心や探究心を自発的に喚起することにつながっている。保護者と共に同じ実験に挑戦することにより、①親子で同じ対象について共に考える機会となる。②普段見ることのない保護者のスキルを子どもが発見することによる保護者への尊敬の心が生まれる。③保護者はその子どもの集中力の強さを知る機会となる。などの効果が得られた。児童が作製した作品を持ち帰り、家族に説明することは、記憶や能動学習の法則などで最上位に位置する「教える」ことに対応する。社会問題になっている体験格差の要因である参加費、参加場所への移動や保護者の時間などをできるだけ軽減する方向で体験実験を企画運営した。

[議論]このような活動の学内での位置づけはどのようにになっているのであろうか。大学からの支援も多く見られる。工織大にも補助制度がある。龍谷大学では大津市の支援を受けた。教員が主体でやると継続することが難しいため、学生サークルに依頼するケースもある。宣伝が主となると教育が二の次になる懸念がある。

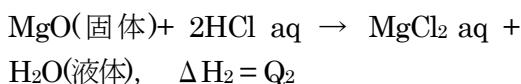
坂口知輝『高等学校化学におけるエンタルピーの授業と生徒実験－学習指導要領改訂を受けて』(報告：左近拓男)

2018 年に改訂された学習指導要領では、従来の熱化学方程式による表現に代わり、化学反応の前後の化学エネルギーの変化量であるエンタルピー変化 ΔH を用いることが明記された。この変更は、大学教育や国際的な教育基準に対応したものであり、高校段階においてもエンタルピーやエントロピーの概念に触れさせることが意図されている。2017 年以前の指導要領では、化学反応式は熱化学方程式を用いた表記であり、 $C(\text{黒鉛}) + O_2(\text{気体}) = CO_2(\text{気体}) + 394 \text{ kJ}$ のように発熱量が 394 kJ と生徒にもわかりやすい表記であったが、現在の表記はエンタルピー変化 ΔH を用いた表記であり、 $C(\text{黒鉛}) + O_2(\text{気体}) \rightarrow CO_2(\text{気体}), \Delta H = -394 \text{ kJ}$ のように、エンタルピー変化の正負と発熱(ΔH が負)・吸熱(ΔH が正)の反応の対応関係に混乱することも少なくなっている。ヘスの法則を用いてエンタルピーを計算する問題では、エネルギー図を書くことに困難を感じる生徒が多く、問題を解きにくいという声も挙げられている。

生徒実験では、ヘスの法則を用いてマグネシウムの燃焼エンタルピーを求める実験を実施し、生徒の理解促進を図った。生徒はヘスの法則を用いてエネルギー図を作成し、直接測定することができないエンタルピー変化を算出した。安価で扱いやすい実験装置を開発し、4 クラスで実施された。化学反応式 $Mg(\text{固体}) + \frac{1}{2} O_2(\text{気体}) \rightarrow MgO(\text{固体})$, $\Delta H = Q$ (Q : 反応熱) で表されるが、その燃焼エンタルピーを直接測定するために、塩酸(塩化水素水溶液 $HCl \text{ aq}$)の反応



および、酸化マグネシウムと塩酸の反応



における反応熱 Q_1 , Q_2 を測定することで、ヘスの法則を用いてマグネシウムの燃焼エンタルピーを求める。このとき、 $H_2O(\text{液体})$ の生成エンタルピー を ΔH_3 として $\Delta H_3 = -286 \text{ kJ/mol}$ を用いる。ヘスの法則を用いて、 $\Delta H = \Delta H_1 + \Delta H_3 - \Delta H_2$ より反応熱 $Q = \Delta H$ が求められた。実験装置は発泡ポリスチレン容器、プラスチックシャーレ、プラスチックストロー、温度計からなり、安価な材料で構成される。実験では、グラフ用紙が配布されていて、軸や目盛を

記入し、得られた各測定点のデータを同時にグラフにプロットすることで温度変化の様子を確認しながら実験を進め、想定とは異なる挙動に素早く気づくことができるよう工夫している。実験結果は文献値(-602 kJ/mol)よりも少し小さく、平均で $-553 \sim -569 \text{ kJ/mol}$ と 1 割弱の差が生じた。この差の主な原因として、発生した熱が溶液の温度変化だけでなく、装置自体の温度上昇にも使われたことや、かき混ぜ不足による溶け残りの発生、最高温度の読み取りに伴う誤差などが原因として挙げられた。

この生徒実験の成果としては、グループでの分担作業を通して、生徒の参加意欲や主体性を高めることができたこと、ヘスの法則を利用してマグネシウムの燃焼エンタルピーを間接的に求める方法を修得したことで、化学反応の概念に関する理解が深まったとのことである。

近年では、高校の化学や生物で内容の高度化が進んでいる。学習する内容が多岐にわたるため、実験する時間も確保できないのが実情であろう。本論文のように化学反応の実験を体験し、データを作図して計算し、反応熱を求めていく過程は、化学の理解を進める上で貴重であると思う。生徒が実験を行い、手を動かして科学現象が理解し実感できる時間は、生徒が科学的現象を深く理解するためにも増やしていくべきだと考える。

治安維持法・京都学連事件100周年実行委員会拡大事務局会議報告

12月13日(土)開催予定の記念シンポジウムについて、標記の打ち合わせ会議が11月16日(日)13:00~14:45、キャンパスプラザ会議室にて開催され、河音幹事と清水が参加しました。事務局作成のまとめより要点を記します。プログラムは既報を参照してください。

- ① 報告時間の確認:基調報告30分、報告①～④各20分。
- ② シンポジウムの配布資料について:レジュメ(資料含む)A4判2枚(本文10.5ポイント)原稿締め切り12月5日とし、事務局で

印刷、冊子とする。表紙、呼びかけ人あいさつ、実行委員会加盟団体の名刺広告を掲載。

- ③ 参加目標 250名。参加資料代 500円、ZOOM 参加者振込、加盟団体分担金 3000円。
- ④ 当日の運営:要員集合 11:30。
- ⑤ 成果の書籍化(録音をベースに、1月刊行をめざす。販価予定 500円)。

(文責・清水民子)



書籍紹介『不登校、ひきこもりと共に生きる社会～本人、家族の声から考える』田中義和、藤本文朗、森下博編

『不登校、ひきこもりと共に生きる社会～本人、家族の声から考える』

田中義和、藤本文朗、森下博編

（新日本出版社 FAX 03-3423-8419 12月18日発売予定 予価 1900円+税）

〈目次〉

第1章 家族の思い

やつと やつと 冗談言える 人の強さを信じて 27年間のひきこもり
頭を上げてみると 「待て、しかして希望せよ」は今も私の実践課題

第2章 ひきこもり経験者として

不登校は必要不可欠な時間だった 今、必要なのは「支援」なのか、それとも…。
信頼関係の構築が勇気を与える 今も苦しみ続けて 差異の認知から出発を
私にとっての「かしいふく」とは

第3章 支援する経験から見えてきたこと

ひきこもり家族・当事者の事例から学ぶこと 不登校・ひきこもりという「人生の道草」
家族をささえて25年、対話と安心の居場所
生きる喜びはだれにでも—子どもも大人も元気になる居場所づくり

第4章 共に生きる社会をつくる

登校拒否・ひきこもることか問題視されない社会をどうつくるか 前島康男
登校拒否・不登校から問い合わせ教員養成と研修の課題 伊田勝憲
ひきこもり支援の現状とひきこもり基本法 田中義和
ひきこもりと生活保護
スウェーデンのひきこもりの若者の実態とそのとりくみ サリネンれい子
コラム スウェーデンのひきこもりについてのインタビュー
ひきこもり支援の目指す姿「自律」

この本は不登校・ひきこもり研究会（座長 伊田勝憲）のこの4年間の成果を反映したものです。

編集者3名は全員京都支部のものです。感謝を込めてここに報告します。
ご一読ください。

藤本文朗

科学カフェ京都 11 月定例会岡田知弘氏講演『湯川秀樹旧宅の京都大学への 移管と現状について』を聞いて

報告者は NPO 科学カフェ京都の運営に関わっており、今回橘大学学長の岡田知弘氏にカフェでの講演をお願いした。科学カフェ京都は京都大学理学研究科セミナーハウスを会場に、月に一回のペースで市民向けに、主に自然科学に関する講演会を開催している。2004 年に第 1 回講演会を開催して以来、11 月 15 日に開かれた今回は第 195 回目にあたる。岡田氏は「湯川秀樹旧宅の保存と活用を願う市民の会」代表を務めており、講演では湯川の残した資料を通して戦前から戦後の京都の科学コミュニティの様子を詳細に解説いただいた。我々日本科学者会議京都支部にとっても大変貴重な知見を得ることが出来たことから、一参加者として報告を書くことにした。以下は講演の大まかな内容である。

岡田氏はまず生い立ちから語られた。富山県高岡市出身であり、イタイイタイ病の地元である。高校生時代の多感な時期に、そこから地理学をやりたいと思い京大文学部へ入学、そこから経済学部へ転学し地域経済を専門とする。当時法経 1 番教室での湯川の講演会を聞いたのが出会いで、「大学ではお互いをさん呼びしよう」という歓迎の言葉を記憶している。その後月日がたち、京大機械系工学会で講演をした後、交流会で「湯川秀樹」の名前があげられていたので話を聞くと、湯川邸には湯川の長男の妻由規子氏が住んでいたが、住居の維持が大

変なので京大へ移管できないか考えているという。湊長博京大総長は高岡高校の先輩であることもあり一肌脱ぐことになる。湯川邸は 1933 年建築の住宅で、湯川がノーベル賞受賞後体調を崩し、くつろげる場所をもとめ 1951 年にそこに転居している。

2020 年～21 年春、坂東昌子氏、佐藤文隆氏、尾池和夫氏、山極壽一氏などが湯川邸の京大への移管を湊総長に提案した。しかし学内での訴えだけでは動かないということで市民の会の設立に向かい、21 年 3 月 1 日「湯川秀樹旧宅の保存と活用を願う市民の会」を設立した。この日は 3.1 ビキニデーで、湯川が反核運動へ向かうきっかけの日でもある。21 年 9 月には安藤忠雄の仲介で長谷工コーポレーションが旧宅を購入し京大へ寄贈したことを発表、示されたデザインは安藤風の突飛なものであった。会は翌日に記者会見を行い、市民の会や由規子氏の思いを表明した。京大の担当部署と懇談し、現状の旧宅と庭を極力残すこと、近隣住民にも開かれたものにすること、遺品類は出来るだけ保存し活用することを要求してきた。

旧宅には膨大な資料が残されていた。中にはスミ夫人がノーベル賞授賞式で着た着物もある。京大は学術的資料のみ保存を計画していて着物はだめというので、現在檀王さんで保管している。市民の会は全資料の保存を要求し荒目録を作成した。資料の

中には膨大な書籍があるが、手書きの書き込みのあるものだけ保存した。西田幾多郎「哲学概論」の講義ノートも見つかっている。講義ノートに数式と和歌が書かれていたりする。退職後続けた対談の映像も多く残されている。

岩波の雑誌「世界」創刊号に湯川は「自己教育」を執筆、どんな日本をつくるか、自分の頭で考えることが必要と訴えていた。発想の由来は土田杏村と考えられる。広辞苑を編纂した新村出の息子新村猛が三高時代の同級生にいる。その下に朝永振一郎も。滝川事件後、その結末に不満を持つ京大文学部中心に隔週で「土曜日」新聞、月刊で雑誌「世界文化」を発行した。武谷三男も執筆している。四条木屋町下がる喫茶室フランソワに「土曜日」が置かれていた。治安維持法違反で猛が逮捕される。当時広辞苑編纂では物理用語は湯川が監修していた。

「自由大学雑誌」は京大理学部で働いていたこともある山本宣治が出版を助言、彼のいとこがタカクラ・テルと結婚し上田市に移り自由大学を支援、雑誌の購読者であつた新村出をとおして湯川は土田杏村を知ることになった。新村猛は名古屋大学へ移り、退職後、経営破綻した橘大学の学長として再建に尽力した。講演者と縁がつながった。

資料の中にスミとの合作「まがつびよ 再びここにくるなかれ 平和を祈る人のみぞここは」(歌は湯川、絵はスミ夫人)、西田幾多郎の書、雪の研究者中谷宇吉郎との合作もある。北大で集中講義を行った際肺炎を発症し、一ヶ月中谷家に滞在する。のち家族ぐるみで交流する。スミの残した新聞スクラップに1963年返還前の沖縄訪問の記事がある。高校生向け講演を多く行ったが、

当時教育会会长の屋良朝苗が組織した。訪問で湯川はショックを受けたという。琉球大学図書館に湯川の揮毫による「學而不厭」の碑がある。1981年6月第4回科学者京都大會議(パグウォッシュ会議)に出席、その3ヶ月後に死去している。

建物の話に戻ると、完全な立て替えではなく、京都市条例にもとづく近代建築物として価値が高い建物部分、主庭屋玄関など湯川とゆかりの深い部分を現地再生で保存し、老朽化部分を撤去、一部新築することとなった。市民の会の願いがかなったといえる。一方、どう利用するかについては、「京大下鴨休影荘」と名付けVIP用迎賓館として使うという。空いているときは研究目的で使用するとし、一般市民に向けた美術館的な使い方はしない。寄付主の由規子氏の希望に添うものではない。市民の会として有効活用を要求している。

資料については保存・管理・運営方針を検討するワーキンググループが設置され、岡田氏と佐藤文隆氏が参加している。詳細目録については人文科学研究所にて5年計画で作業中である。

「湯川秀樹は今でも生きている」というのが市民の会のメンバーの感想である。京都市や安藤事務所にも湯川のためなら協力するという人々が大勢いる。佐藤文隆氏の死去は本当に残念だった。彼の貢献はかけがえがない。講演を湯川の座右の銘で締めくくりたい。「一日生きることは 一歩進むことでありたい」

講演の後、1時間以上にわたって質疑応答が続いた。これは科学カフェの伝統でもあるのだが、様々な質問が出された。ここではその中からいくつか紹介する。

1946年、日本科学者会議の前身である民主主義科学者協会京都支部の設立記念講演会で自然科学は湯川が、人文社会科学は新村猛が講演したそうである。

湯川が原爆開発に関与していないかったことは京大荒勝文策教授らの調査で明らかになっている。1938年当時、阪大副手であった武谷三男が「世界文化」新聞で逮捕されたとき坂田昌一が講師、湯川が助教授であった。湯川が武谷をもらい受けに行っている。特高月報に危険人物リストとして湯川の名前もあった。「世界文化」を購読していたためだと思われる。ナチスが若手物理学者を戦意高揚に利用したのをならったのか、1943年に若くして徳富蘇峰とともに文化勲章を受章している。

当時は戦争に協力するしかなかったが、その中でも新村猛は反戦をペンネームで訴えた。ジャーナリストは現地に行って伝えるが、知識人の役割は発信をすること。社会で最も自由な発言をしているのは大学人だが、最初の治安維持法弾圧は京都学連事件で大学が狙われた。次に追放されたのが河上肇、さらに1933年には滝川事件があり右翼団体の攻撃に法学部教授会は総辞職で答えた。他の学部はどうしたか。結局は戦争協力につながった。戦争に時代が向かうとき、学問の自由・大学の自治が最初に狙われる。今はどうであろうか。

報告：坂本 宏



支部主催・関連行事

1. 治安維持法・京都学連事件 100 周年共同シンポジウム

日時:12月13日(土)13:30~17:00

場所:立命館大学二条学舎

講演・報告:◎京都学連事件について、①国境を越えたエスペランティスト・長谷川テル(奈良)
②淡徳三郎の「フランス人民戦線」などの通信活動(京都)
③反ファシショの学生運動・大阪商大事件(大阪)
④大学の自治の現在と学術会議の危機(日本科学者会議京都支部*)(*本支部からの報告
は支部幹事・河音琢郎氏(立命館大学)が担当されます)
⑤会場からの発言.

主催:治安維持法・京都学連事件 100 周年事業実行委員会、日本科学者会議京都支部

2. 京都支部12月読書会(ZOOM)

日時:12月23日(火) 15:30~17:30

日本の科学者2025年11月号「洋上風力発電の課題」

草島論文(左近)／田鎖論文(前田)／鈴木論文(坂本)

<https://us06web.zoom.us/j/85070158792?pwd=iI0JoRFbBzmUofF9GVXY4B3J3kuDfy.1>

ミーティング ID: 850 7015 8792

パスコード: 350191

3. 2026年JSA京都支部新年会(ZOOMと対面のハイブリッド)

日時:2026年1月10日(土)15:00から18:00

場所:JSA 京都支部事務所

<https://us06web.zoom.us/j/81964948478?pwd=oCbIMHmB32Kvpt8AAylGsYP5PcSCe.1>

ミーティング ID: 819 6494 8478

パスコード: 948247

4. 不登校・ひきこもり研究会

合評会

伊田勝憲

「登校拒否・不登校から問い合わせる 教員養成と採用の課題」(「日本の科学者 8 月号」)の合評会

指定討論者 谷口清氏(東京地区) 安井勝氏

1月18日(日)13:30~16:00 立命館大学朱雀キャンパス

ZOOM 参加可能 アドレス等は改めて連絡します.

不登校・ひきこもり問題に関心のある皆さまの参加をお待ちしています.

連絡先 田中義和 tnkyskz@gamil.com

◆◆◆ 支部幹事会だより ◆◆◆◆

1. 会員の現況 (12月1日現在)

一般会員 : 144
特別会費会員 : 4
家族割り特別会費会員 : 2
若手会員 : 13
【会員合計】 163人 読者 : 3人

2. 会費納入状況 (11月1日現在)

一般 103／144, 特別 1／4, 家族 1／2, 若手 5／13
※ 前納の会員8人 (すべて一般) を含む。

3. 2025年11月決算

2025年度累計	2025年11月決算
収入累計 1,571,596円	11月収入合計 131,400円
支出累計 1,270,924円	11月支出合計 49,278円
収支累計 300,672円	11月分収支 82,122円
前年度繰越金 173,345円	前月繰越金 391,895円
11月末残高 474,017円	11月末残高 474,017円